平和への願い

網走市立第三中学校　三年
奈良岡　柚妃（ならおか　ゆずき）

私は今回の平和都市友好交流事業を通して、感じたことが三つあります。一つ目は、戦争の恐ろしさです。私は、二日目の平和学習で沖縄戦体験者の久保田暁さんの講話を聞きました。久保田さんは沖縄戦当時赤ちゃんでした。久保田さんのお母様は、二歳の久保田さんの兄と六人で逃げていました。

久保田さんのお母様は二人の子どもを守ろうと、必死になってアメリカ兵の攻撃から逃げていました。日本兵にガマを追い出されてからは、王家の墓に身を潜めて生活していました。夜になって、米軍の攻撃が少し落ち着くと、食糧を探しに行ったそうです。そこで目にしたのは、攻撃で亡くなった人や、その亡くなった人が井戸にたくさん浮いているところでした。久保田さんのお母様は「ごめんなさいね、ごめんなさいね」と言いながら水を汲み上げました。私はこの話を聞いて、心が締め付けられました。罪のない人がなぜこんな悲惨な戦いで命を落とさないといけないのか。戦争は何も生み出さずに、人の心を壊し、人を人でなくする。このことが、私の心に強く刺さりました。

二つ目は、同年代の人への祈りです。ひめゆり平和祈念資料館に行ったときのことでした。私はそこで目を疑いました。なぜなら、私と同年代くらいの子たちの写真がたくさんあり、その写真の下には、彼女について書かれていたからです。それに彼女たちの持ち物や来ていた服なども展示されていました。ある方の服には、血の跡がついていました。生きてほしかった、立派な先生になってほしかった。彼女たちへの思いで胸がいっぱいでした。最後まで、兵隊さんのために命をかけて看病している姿や、生きて、お母さんに会うために自決をやめる姿。彼女たちは、毎日必死に生きていました。それなのに、教師含めた百三十六名が帰らぬ命となりました。彼女たちは戦争が始まるまで、普通の女の子たちでした。部活や勉強に一生懸命に励んでいました。なのに戦争が彼女たちを狂わせました。

三つ目は、平和な時代への感謝と戦いをなくすためにはです。少し最初に戻りますが、久保田さんは私たちへの講話のときにこのようなお話をしてくれました。ある特攻兵のことです。彼は「僕には夢がある。先生になりたい。それよりも戦争のない時代に生まれたかった」と。私はとても恵まれた時代に生まれました。戦火もなく、夢を持ち、実現できる時代に生まれました。だからこそ戦争の悲惨さと平和の尊さを多くの人に知ってもらいたいです。平和の尊さを知るには多くの人が正しい歴史を学び、それを共有できる世の中になってほしいです。私は戦争が嫌いです。なぜなら人を人でなくしてしまうからです。人と人が殺し合いをするからです。世界が黒く見えてしまうからです。私は世界中の人が手を取り合って、美味しいものをたくさん食べられて、武器がない平和な世界になることを心から願っています。この奇跡の星、地球から戦火が消えますように。

今回の事業で平和の尊さについて学びましたが、もう一つ大切なことを学びました。それは友情です。みんなで平和について学びつつ、ホテルではお祭り騒ぎをしていました。飛行機では、部活のことで盛り上がりました。この平和がいつまでも続き、平和が広がりますように。そのためには、過去に学び、その学びを多くの人と共有することが大切です。